令和２年１２月１４日

今日のシライ中

本の翼　白井中学校図書室から VOl.33

平和な世界は、たゆまぬ努力を続けなければ、あっという間に失われてしまいます

これは、戦場ジャーナリストの山本美香さんの『戦争を取材する　子どもたちは何を体験したのか』　講談社　という本にある言葉です。

地雷で足を失ったコソボの子ども、ゲリラに誘拐されて少年兵として戦わされたウガンダの子ども、廃墟を転々として子どもだけのグループで生き延びようとする戦争孤児。世界中の戦争の現場に行き、戦争により人々の生活がどのように壊されていったかを生々しい言葉で語っています。私がその内容とともに心に響いたのが、山本さんの仕事に対する思いでした。（以下は本文から一部抜粋要約）

まだ戦争取材をはじめたばかりのころ、自分の仕事について悩んだことがあります。医者なら命を助けることが出来る。けれど**自分のしている仕事がどれだけ意味があることなのか。**ふと自信がなくなったのです。

そんなある時アフガニスタンで、避難民の一家に出会いました。避難民の父親が「これを見てくれ」と案内してくれたのは、つい数日前に幼くして死んだ息子のお墓でした。「もし薬があったなら、息子は死なずにすんだのに」父親が目を赤くして泣いていました。私はビデオカメラで撮影しながら、どうしたら彼らを助けることができるだろうと自問しました。カメラを持つ手が重く感じられ、力がぬけていきそうになりました。そのとき、父親が言いました。

「こんな遠くまで来てくれてありがとう。世界中のだれも私達のことなど知らないと思っていた。忘れられていると思っていた」

ありがとう、ありがとうと涙を流す姿に大きな衝撃をうけました。

私がこの場所に来たことに意味はある。いいえ、意味あるものにしなければならない。たったいま目撃した出来事を世界中の人たちに知らせなければならない。私のちっぽけな悩みなど、吹き飛ばすほどの衝撃でした。やらなければならないことは山ほどある。このときジャーナリストという仕事に全力をそそいでいく決意が固まりました。

未来を生きる生徒の皆さんにはぜひ読んでほしい一冊です。残念ながら山本さんは、2012 年８月、内戦中のシリアで銃撃に巻き込まれ亡くなってしまいましたが、この本の最後でこう語りかけています。

「さあ、みんなの出番です。」